AION 1996　Vol. 27　から

赤坂陽子

コロンビア大学修士課程で、人権問題や女性問題、難民・移民についての研究を行う。旧ユーゴでの緊急援助ボランティアなどを経て、AMDA JAPANスタッフとなる。難民および移民の移住・定住・帰還などを支援するIMO（国際移住機構）のパートナーとして、AMDAはチェチェン難民の医療問題を担当。これを機会にチェチェン共和国へ。95年4月から96年6月まで、チェチェン共和国、イングーン共和国、北オセチア共和国などで活動する。大阪生まれ。

戦火に追われる難民と過ごした日々。

チェチェン共和国から帰ってきて、一週間がたちます。他人の目に、私はどんなふうに映るんでしょう。力が抜けて見えるのか、それともまだ緊張を保って見えるのか。この平和な日本にいる間も、チェチェンではさまざまな衝突が続いています。ロシア連邦からの独立を目指す人々、これを阻止しようとするロシア政府。この争いにチェチェン人、イングーシ人、ロシア人、それぞれの内部対立がからんでいるのです。和平への道が模索されていますが、出口はなかなか見えてきません。ごく普通の人々が家や仕事を失い、大切な命を危険にさらし続けている状態です。

1年と1カ月前、私はチェチェン緊急プログラムのスタッフとして現地に派遣されました。行動をともにしたのは、ネパール人ドクター2名と、現地採用の通訳。私の仕事は、医療活動を滞りなく行うためのコーディネートでした。国際赤十字や〝国境のない医師団〟など、たくさんの医療団体との調整や連絡、政府機関や軍との交渉……外国人は移動の自由もままならないのです。また、どういう病気が多いかを把握して薬を買いに走ったり、ベッドやベビーフードを調達したりする。日本でもそうですが、役所などが相手の場合、強く出るだけではいい結果を得られない場合が多いですよね。粘り強く立ち向かっていく、外交のテクニックが必要になってきます。

戦火から逃れてきた人々は難民キャンプでの生活を強いられている上、ひもじさや病気といった苦しみも後を絶ちません。衛生状態が悪いための皮膚病、ストレスから来る心臓病、暖房設備がないための風邪、さらにロシア全体で発生率の高い結核……。それほどせっぱつまっていなくても、ドクターと話をしたり、見知らぬ同志で触れ合ったりと、医療の場が精神的な発散に役立っていた面もあるでしょうね。私は医療面では素人です。でも、素人なりの提案をしたり疑問を投げかけたりしました。ドクターたちには、多少、煙たがられたようですが(笑)。ドクターが病気を診るのなら、私は生活面のコンディションを視る立場だったと思います。

国境の検問所に立ち、チェチェンから逃げて来る人々を待って手当てを行ったこともありました。その間も、彼方の空ではロシア軍による空爆が続いていたのです。戦争がいやとか殺し合いがどうのなんて考える前に、行動するしかありません。でも、ボランティアにも限界があります。意欲だけで何でもできるわけじゃない。命の危険を冒して戦地にとどまったり、銃弾に身をさらすようなことは慎むべきでしょう。私たちは死にに行ってるんじゃないんです。とるべき危険と無駄な危険は、その場で選ばなければ。自分のすべきことを冷静に判断する職業意識、プロの持つ責任感。チェチェンで過ごした1年1カ月の間に、こうしたことを身につけたのだと実感しています。